リングリングプロジェクトを訪ねて⑫

映画や音楽などを通じて子どもたちを育んでいく

財団法人
三鷹市芸術文化振興財団

音楽、演劇、美術、文芸など、さまざまなジャンルの芸術文化を発信する複合施設、三鷹市芸術文化センター。秋に行われる、みたかジュニア・オーケストラの定期演奏会をはじめ、さまざまな催しが行われている。施設の詳細、イベントカレンダーなどの案内は、(財)三鷹市芸術文化振興財団のサイトから確認できる。http://mitaka.jpn.org

内藤佳有氏の指揮で『豪勇ロイド』に合わせ演奏する、みたかジュニア・オーケストラ。堂々とした姿で、見事に映画音楽の生演奏を務めた。

東京都三鷹市は、武蔵野の面影を残した街として多くの文豪や芸術家から愛され、また、市民の文化活動も活発に行われている、文化の薫り高き土地。ここで、市民に優れた芸術文化の提供と自主的な芸術文化活動の奨励・援助を行い、芸術文化の振興と地域文化の発展に寄与するための活動を行っているのが、「財団法人三鷹市芸術文化振興財団」である。

1995年3月31日に設立されたこの財団は、三鷹市公会堂や三鷹市芸術文化センター、三鷹市山本有三記念館、太宰治文学サロンなど計6施設の管理運営をしながら、演劇・音楽・美術・文芸の4ジャンルで、毎年数十に及ぶ主催事業を展開。

その中のひとつ、『小学生向け活弁映画上映　ぼくもわたしも活弁で映画を見るのだ！』は、小学生の夏休みに合わせて開催された事業。無声映画に合わせ、活動弁士がストーリーや登場人物のセリフを語る活弁。今年で5回目となるこの催しについて、同財団の事業課主査　広報企画の市川亜樹子さんに伺った。

「三鷹市芸術文化センターでは、設立当初から古い映画の上映を行ってきました。そこで無声映画を取り上げ、日本を代表する活動弁士の澤登翠さんと出会ったのですが、活弁映画は子どもたちにも喜んでもらえると考え、また、日本独特の文化である活弁を継承していきたいという思いもあって始めました」

今年は、1930年頃に日本でつくられた『弱虫天国』、三大喜劇王のひとりと称されるハロルド・ロイド主演の『豪勇ロイド』と『ロイドの巨人征服』、計3本の〝ドタバタ喜劇〟を上映。同財団の事業課事業係長兼演劇企画員の森元隆樹さんは、作品選びについてこう話す。

「子どもたちが初めて活弁を見ることを想定しており、おもしろくて最後まで飽きさせない、スピード感のあるコメディを主に選んでいます」

3作品は、笑えるだけでなく「諦めずに頑張ろう」という共通のメッセージも込められているのだそう。『豪勇ロイド』は、同財団が支援する「みたかジュニア・オーケストラ」の生演奏つきで上映された。

「みたかジュニア・オーケストラ（MJO）」は、1999年に地域貢献や児童・青少年の健全育成という観点から発足。月3回の定期練習や春・夏の強化練習で研鑽を重ね、定期演奏会や市のイベント、老人福祉施設などに出向いての訪問演奏など、地域の顔としても活躍している。

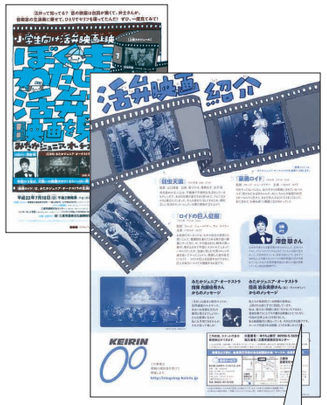
「現在は、小学6年生から高校3年生まで43人が在籍しています。練習は三鷹市芸術文化センターにある音楽練習室。講師陣は、当ホールを拠点にしているトウキョウ・モーツァルトプレーヤーズの団員。プロの演奏家の指導を直接受けられるというのが大きなメリットだと思います」と言うのは、同財団事業課主任で音楽企画員の大塚真実さん。

「MJOでの経験は、子どもたちにとっていい刺激になると思います。私どもは子どもたちの才能や可能性を引き出す手助けができればと考えており、さらに自主性が育まれるよう、さまざまな場面で、子どもたちが自分で考え、行動できるよう見守り、支えていく姿勢を心がけています」

上映会当日。客席では、子どもも大人も映画のスクリーンを食い入るように見つめ、活動弁士の鮮やかな口調に聴き入っていた。楽しい場面では皆が一斉に大笑いし、スタントなしのアクションシーンでは一同がハッと息をのむ。客席が一体となって盛り上がるそのライブ感は、活弁映画だからこその魅力といえよう。

上映後は、子どもたちが「おもしろかった！」と口にしながら帰る姿が印象的であった。「全部おもしろくて、また何回も行きたいです」（小2女子）、「楽器を弾いていてうまくてびっくりした」（小1女子）など、アンケートにも多くの喜びの声が。

同財団では、今後もさまざまな芸術文化を通じ、教育普及に努めていくという。子どもたちの輝きや地域とのかかわりを強める取り組みの、これからの動きにも期待したい。



上映当日、客席は子どもたちや保護者で満席に。チラシは三鷹市内にある公立の全小学校15校にも配布された。

みたかジュニア・オーケストラ 団員 岩永実奈（だんいん いわなが みな）さん（高2・ヴァイオリン） からのメッセージ

私たちが普段見ている映画の音楽は、
上映される前にすでに完成しています。
私は、音のない映画に音を「付ける」のではなく、
音楽を奏でることでその響きは映像とひとつになり、
作品が出来上ることを知りました。
私も映画製作に関わっている、それは大きな喜びです。
ホールで完成される映画、どうぞお楽しみください。

競輪マーク みつけた 〈(N)バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター〉

バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センターは、耳が聞こえない子供の「手話」と「日本語の読み書き」の二つの言語能力をバランスよく育てるため、競輪の補助金により、日本で初めてのバイリンガルろう教育の教材開発に取り組み、「ろう児を主人公」にした心温まるテキストと手話映像DVDを制作しました。

pedaru_12_22-35_out.indd 22-23
11.4.22 11:37:26 AM